

埴岡健一先生から、レポートへのお返事

山口久美さん

>「私もイノベーションの渦の中にいたんだ・・・」

そうなんですね。

それは、山口さんが、もう「でんぐり家」だということかもしれませんね。

たしかに「倫理教育としてのでんぐりがえしプロジェクト」が、

小学校、中学校、高校で必要なことに気づかされます。

広がってほしいですね。どのように展開していくのか興味深いです。

星野晴彦さま

>運としか思えないようなときがある

たしかに、おっしゃるように、「運」が大きいような気がします。

ところで、でんぐり家は「偶然」を「必然」にする力をもっているように見えますね。

どうして、でんぐり家には、セレンディピティが高確率で生まれるのかなー？

それは、問題解決につながることを365日24時間、情熱かけて探しているからかも。

言い換えると、解決のために社会を「再編成」しているためでは。

つまり「運」ではありますが、「運」を「組織化」（やはり Organize ですね）しているのではないかな。

「運命」を「宿命」にする、とも言えるかもしれませんね。

また、でんぐり家の方々が人間力があるように見えるのは、

使命のために自己を捨てているからかも。

ひょっとしたら、原点を見失わないままに、

目的のために自分を変えて相手に合わせる力を持っているからではないでしょうか。

…などとお手紙を読みながら思いました。

新藤さえさん

>共通するのは、病気や障害など自らが経験した喪失体験に対し、誇りを持っていること

なるほど。教えられました。

でんぐり家には、「喪失体験」→「使命感（誇り、喜び）」が共通するような気がしますね。

そういえば、ときに、障害や病気を負った人が Gift という言い方をされますね。

登壇者の中にも「今となっては〇〇でよかったと思う」といったことを言われ、

ドキリとしたことがありました。

これは受苦を使命に変える段階に至った当事者だからこそ言えることで、

外からの論評としてはけっして軽々とは言えないことですね。

でんぐり家でくっきりと表れている特色ですが、考えてみたら、

だれでも、多かれ少なかれ喪失体験があり、Gift を得ているのかもしれません。

そんなことを考えさせられました。

田中知世子さま

>自身も変革しなければと心が騒ぐ。

にっこりアジテーター。沈黙のリーダー。

いいですね。

もう、田中さんは、かなりでんぐりしかかっていますね（笑）。

田中さんは、ソーシャルアントレプレナーでいらっしゃる。

これは、事業のかたちで社会変革する人ですね。

だから、すでに社会変革家なのでしょう。

でんぐりに感性・親和性があるソーシャルアントレプレナーは、

でんぐりを、そして社会変革を強力に加速するのだと思います。

修論をそのきっかけにしようとされているところも、クリエイティブだなあ。

田島貴大さん

＞社会を変えることが目的であるため、自分を変えることもいとわない

ボクもスパイダーマン大好きなんです。

エンターテイメントじゃなくて、変革リーダーの教科書のひとつ。

フツーの人にある日いきなり非日常がやってくる。

運命を使命に変えて、成長して社会を救済するハナシ。

ベンおじさんのシーンを紹介するとき、号泣しそうになります。

利己を捨てて大義をとった彼は、後に自己も得ることができるのでした。

スパイダーマンが歩いて道を、

みんな多かれ少なかれ、でんぐり家として歩いていきたいものです。

井手公正さん

＞私は使命感（きっと、あの時の自分を救いたい、他の方々のきっかけやヒントにもなるのでは…というような思い）が強いので、自分を変える事さえ厭わない…

私にとっては、井手さんはすでに尊敬すべき「でんぐり家」です。

自分の内なる声を見つけ出し、それに従って、すでに沼地を歩みはじめておられます。

世の中のリーダー成長ストーリーを読むと、これから鬼や龍が目の前に立ちはだかるとのこと。

必死に闘って倒してみたら、なんとそれは他ならぬ欲や恐れや嫉妬といった自分のことであることが多いそうです。

私の出来の悪い「歩みの道（素案）」の図を壁に貼って、

毎日、その上に赤ペンで修正を入れていただければうれしいです。

小宮玲子さん

＞「人の目」を気にするのではなく、「神の目」を気にする。

マザー・テレサは「汽車に乗っているときに神の声を聞き」、

カルカッタに向かったといいます（正確か自信ないけど…）。

罪の文化ではなくわりと恥の文化にいたい私たちのために、
ときに「神の声」と呼びつつも、広めるためには「(自分の)内なる声」と呼んでいいかもしれません。

ゆきさんがおっしゃる「ほっとかれへんという気持ち」。それは「内なる声」。
日常の自分の声は利己的なのかもしれませんが、内なる声は利他的になってくるのでしょうか。
不条理への義憤に基づく内なる声は、大義や正義への正当性を帯びているもの。強さをもつ。
そのときに、ジェラシーにも自己顕示にも恥の気持ちにもびくともしないことになっていますね。
内なる声を聞いたとき、「旅」の準備が始まるのかもしれないですね(!)。
小宮さんの深い深いコメントに、ずれてしまったかもしれませんが、
いろんなことを考えさせられました。ありがとうございます。

田原浩子さん

>「言うだけではダメ、変えてなんぼ」。政策策定プロセスのでんぐり格差

ツボに触れていただいた感じです。
すでに社会変革家でいらっしゃるだけに、社会変革への感性が鋭いですね。
確かに、変えてなんぼ、なんだと思います。
そのためには、やっていいこと、やれることは何でもやる…。
政策決定プロセスをでんぐりするの、でんぐり家、でんぐり人たちの仕事。
でんぐり人が集まり、フォロワーの声を集めて届ける、住民参加政策決定型のタウンミーティング
や、六位一体型サミットなどの場づくりやツールも、だんだんできてきておるようです。
だんだんいろいろな芽生えや兆しが出てきているよう…。
僕は、地域の均てん化（いずれもあまねく質の高い状況となっている）も大事に思っています。
均てん化に取り組む「均てん家」も「社会変革家」と並んで、重要ですね。

古瀬（巨匠）さま

>見落とされがち、ある意味で狭間に陥ってしまっているような問題とか。

たしかにそうですね。でんぐりプロジェクトでは、
社会的に看過されがちないわゆるマイノリティの受苦問題が、
掘り起こされているのでしょうか。
そうした領域は、より当事者が声をあげる重要性が大きいと言えるかも。
また、一つ一つは少数でも、150人のでんぐり家が集まれば、
でんぐり家同士も、自分だけではないと、大きな勇気を得るでしょうし、
社会にも大きな影響を与えてくるのでしょうか。
気づきをありがとうございました。

瀬戸山陽子さん

>「受苦」から始まるプロセスを、いつの間にか踏んできてしまったのかもしれない…

>自分が「でんぐり家」かもしれないなんてことは

あのお話をしてよかったなあと思いました。

自分がでんぐり家であることを発見されたのですね。

でんぐりに大小はないでしょうから、でんぐりさえしてたらもう立派なでんぐり家だと思います。

ディパックス障害学生編を作られているのですね。

これ、やはり、ある意味、でんぐり活動ですね。

ステップ図、あのようには未完です。要改訂です。

自分でも半分ぐらいしか盛り込めていない感触。

瀬戸山さんに、

「社会変革家の内的発展プロセスのモデル化とその共有による効果」

という博士論文を書いてもらおうと、助かるんだけどなあ。

あ、それも使命かも～。

私の本を読んでくださっていたのは感激でした。

本にサインするときは、すっかり、あがってしまいましたよ。

ところで、あの本の内容は、こちらでも9割がた読むことができます。

http://www.cancer-patient.net/KEN/essay/essay_menu.html

小見川香代子さん

>私はその感動によって自分の中に新しい風を吹き込みたい。(4年前のレポート)

>いつでも自分に置きかえて考えるということが、原点

>自分がでんぐりがえって、世界を感じるということ・・・

あらためて小見川さん、すごいなあと思いました。

「新タイプのでんぐり」しようとしていますね。

専門職としての社会変革家たらんとすること。

そして当事者の社会変革家の立場も感じ取ろうとすること。

両側に身をおこうとして、引き裂かれるような中で、考え続けること。

そこで、本質的な「何か」をつかもうとすること。

身を削って、専門職と当事者の間の橋を架けようとする事。

それは、専門職を高めると共に、変革の方向を定めた上で、加速するため、

いまの社会にとって、とても貴重なことなんだと感じさせられました。

「専門職・社会変革家と当事者・社会変革家」の対話と協働作業が、

よい社会変革の促進にはとっても大事になる。

——小見川さんの生きざまから、私なりに教わった新しい気づきでした。

ありがとうございました。

松田美恵子さん

>がんサバイバーの一面をもっている

受苦に軽重はなく、自分の感性と受け止め方次第などところがあるのではないかと思います。このたび、自分がサバイバーであることの再発見をされたということでしょうか。松田さんは多くの受苦を受けている人々に献身的な支援をされているなかで、「代理的受苦」を受けて社会変革家となられており、自分のことを後回しにしてこられたのかもしれませんがね。ということは、社会変革家と当事者社会変革家（でんぐり家）のハイブリッド型かも。お仕事も論文も頑張ってくださいーい。

高岡良江さん

＞私は「でんぐり」は、当事者が、自分の力を獲得する歩みであるようにも思います。

さすが、MSWとして、女性相談員として、たくさんの方をサポートされてきた高岡さんならではの洞察だと思いました。

自分の苦しみを力に変える自分におけるでんぐりを果たした人が、社会課題のでんぐりへの旅に出かけていくのかもしれませんがね。

「自分でんぐり」→「世の中でんぐり」。

吉村由佳里さま

＞私も自分の持ち場に活かし、歩みの道を一段一段大切に、でんぐりがえししながら、右に右に進んでて行きたい

放課後の居酒屋「笑笑」でゆかりさまの歩みをうかがい、

でんぐりがえしをされてきたプロセスを知り、

まさに、でんぐり家だなあと感じておりました。

「どう活かすかは、授かった私たちの責務」…。

「授かった」とおっしゃるとき、受苦が使命・ギフトに高められているのですね。

まさに受苦、脱自己化、使命化、責務化を自覚しつつ、実践されているのだなあと感じます。

「右に右にと」…。ポーラ・キムさんも、害が解消したあるべき姿をイメージし、大志をもって歩み続けるのだ、とおっしゃっていました。

北極星を指さし、みんなの視線をそちらに向けて歩むことは、深い力をもたらしますね。

でんぐり家の方から、歩みの図について「希望を熱く感じさせてくれるもの」とのコメントいただくとは、とてもうれしかったです。

でんぐり促進、でんぐり伝播にちょっとでも役立つならば、あの図をどんどんフィットするように描き変えて、使ってください。

山口由里子さん

＞私にとっての「フォロワー」です。

「ほの見える歩みの道」に当てはめて、考えてみてくださったとのこと。
 「何であの子たちは？」で受苦が起こるのは、とっても感受性が高いですね。
 ライフリンクの清水康之さんや、貧困対策の湯浅さんも、
 当事者ではないのに、「何でこの人たちが？」で、受苦されたようです。
 当事者でなくても「代理受難」する力があって、歩みはじめる人も少なくないということですね。

このごろリーダーシップとともに、フォロワーシップということが注目されているようです。
 リーダーにフォローする人がいることにより、
 リーダーは「責務感段階」に進む効果が生じると考えられる、と。
 つまり、リーダーとフォロワーはセット・ペア・双子なのですよね。
 リーダーシップはリーダーのあり方、フォロワーシップはフォロワーのあり方でしょうか。
 フォロワーシップももっと着目され、フォロワーの役割がもっと評価されるべきとも考えます。
 あの「歩みの道」の図は暫定版です。みなさんにどんどん加筆修正していただければと思います。

今回は、えびちゃん、自立生活センター理事長の海老原宏美さんの「私の仕事は社会変革」という一言に鳥肌が立って、考えるきっかけを得ました

(実は、それまで、この授業の時間をどう使えばいいか、真っ白でした)。

ありがとうございました。

埴岡 健一 <<http://www.hanioka.org>>*

oooooooooooooooooooooooooooo

ゆき注：文中に登場する「歩みの道」です(^_-)-☆

